バンカートスクール
2022年1−3月
募集案内

今福龍太「〈原写真〉の翳のなかへ」
福住 廉「アートの綴り方vol.10」
北島敬三「写真の教え」
「ヨコハマみなとみらい物語Ⅲ」
シュウゾウ・アヅチ・ガリバー「作品を語る」

BankART school

バンカートスクールは、横浜・馬車道に残る歴史的建造物を芸術文化に活用したBankART1929のプログラムのひとつとして、2004年4月に開校しました。と書いてから早17年。場所は「馬車道に残る歴史的建造物」から日本郵船の倉庫、関内の泰生ビルへと引越し、さらにBankART Station（新高島駅）、BankART KAIKO（馬車道駅）へと移転しましたが、中身は大して代わり映えしません。バンカートスクールの守備範囲は美術・演劇・写真・建築・音楽・ダンスなどアート全般におよび、講師は各ジャンルの第一線で活躍する人たちばかり。子供向けのワークショップから専門性の高い講座までレベルはさまざまですが、いずれも少人数制で、講師と受講者同士の親密な交流を重視する現代の寺子屋をめざしています。この17年の間に315講座、述べ1,095人の講師の方々をお招きしました。受講生は4歳のおじょうちゃんから85歳のおじいちゃんまで、述べ5,050人をこえます。ぶっちゃけ話、これらの講座をうけたところで即戦力にはならないし、なにか資格が得られるわけでもありません。受けるだけではなんの役にも立たないのです。むしろここから自分たちでなにを立ち上げていくのか、それが問われているのです。

（バンカートスクール校長　村田 真）

BankART school 2022年1月–3月

水 19:30 – 21:00

今福龍太「〈原写真〉の翳（かげ）のなかへ ――現代における〈眼〉の冒険」

①1/19 ②1/26 ③2/2 ④2/9 ⑤2/16 ⑥2/23 ⑦3/2 ⑧3/9

現代社会におけるディジタルな写真イメージの氾濫。それは権力による像の奪取とその恣意的な利用のための決定的な温床となる。「写真」の置かれたこの現代的窮地を受けとめつつ、それにたいして〈原写真〉＝〈イメージの生誕地であり秘められた翳〉への想像力を梃子に、写真の新たな自由と可能性を展望すること。さまざまな〈眼〉の冒険の軌跡をたどりながら、イメージが生れた苛烈な現場、そこから生じた真の倫理的・批評的視線を発掘し、問い直す。

①イントロダクション―〈原写真〉の翳へ ②ここではない場所へ―ヨシフ・ブロツキーの不在 ③時のサウダージ―クロード・レヴィ=ストロースの記憶 ④風景は叙事詩を歌う―セバスチャン・サルガドの創世 ⑤写真は映画の出生地である―ヴィム・ヴェンダースの彷徨 ⑥〈松果体の眼〉の復権―ミゲル・リオ・ブランコの砂漠 ⑦視ることのユートピア―東松照明の反旗 ⑧ベンヤミンの肖像写真―多木浩二の夢

いまふく・りゅうた｜文化人類学者・批評家。ラテンアメリカ各地でフィールドワークに従事。クレオール文化研究の第一人者。奄美・沖縄・台湾の群島を結ぶ遊動型の野外学舎〈奄美自由大学〉を2002年に創設し主宰する。著書に『ミニマ・グラシア』『薄墨色の文法』『ジェロニモたちの方舟』『ヘンリー・ソロー　野生の学舎』（讀売文学賞）『ハーフ・ブリード』『宮沢賢治　デクノボーの叡知』（宮沢賢治賞・角川財団学芸賞）ほか多数。主著『クレオール主義』『群島-世界論』を含む新旧著作のコレクション《パルティータ》全五巻（水声社）もある。30年にわたる写真批評をまとめた『原写真論』（赤々舎）を2021年に刊行。

木 19:30 – 21:00

福住 廉「アートの綴り方 vol.10」

①2/3 ②2/10 ③2/17 ④2/24

展覧会を「見る」だけではなく「書く」ことに挑戦します。同じ目的を共有した受講生たちと話し合いながら、何をどう書くべきかをじっくり考えていきます。今回は10回目にして初の短期集中型講座。2月を「書く」技術を学ぶことに専念してみましょう。

ふくずみ・れん｜美術評論家。「共同通信」で毎月展評を連載しているほか、著書に『今日の限界芸術』（BankART1929、2008年）ほか多数。

※料金＝全4回6,000円

BankART schoolの概要

時間＝19:30〜21:00
会場＝**BankART Station**
横浜市西区みなとみらい5-1
料金＝1講座（全8回）12,000円
初めての方のみ入学金 3,000円
定員＝18名

お申し込み方法

①受講したい講座名 ②お名前 ③ご住所 ④電話番号 ⑤メールアドレスを、メール・電話のいずれかにてお知らせください。

※一旦納入された受講料は返金できません。
※講座によっては別途材料費・資料代がかかる場合があります。
※申し込み受付は定員になり次第、終了させていただきます。

アクセス

BankART Station
横浜市西区みなとみらい5-1
みなとみらい線「新高島駅」地下１階

お申し込み・お問い合わせ

BankARTスクール事務局
school@bankart1929.com
TEL 045-663-2812

マンスリー講座　料金＝全8回参加 12,000円（定員10名）　各回参加 2,000円 / 回（定員15名）

火 19:30 – 21:00

北島敬三「写真の教え」

①2/1 ②3/8 ③4/5 ④5/3
⑤6/7 ⑥7/5 ⑦8/2 ⑧9/6

もとより写真は、純粋な〈イメージ〉ではないし、あるいは確かな〈物体〉でもない。イメージと物との中間に位置する、極めて不安定な存在である。実際に写真は手で破ける。無論、絵画も破くことはできる。だが、そうではない、破かれて物質に帰する絵画とは違い、写真の断片は、そこでまた新たなイメージを生成してしまう。それは、新たな一枚の写真に他ならない。であれば、目の前の一枚の写真はこの世の全ての写真の中の一断片でしかない、とも言えるだろう。さらに原理的には無限に複製可能なのだから、潜在的に複数的なイメージでもある。「一枚の写真」という同一性は、初めからすでに揺らいでいる。おそらくそこが、タブロー絵画との決定的な違いだ。では、写真の可能性の中心とは一体どこにあるのか？ 写真で何ができるのか？ この講座では、参加者が持参した写真を講評することを基本としています。全8回の講座を終えた時点で、参加者がそれぞれ自身の「写真」なるもの、あるいは「作品」なるものを獲得することを目指します。

きたじま・けいぞう｜1954年長野県生まれ。1975年「WORKSHOP写真学校」の森山大道教室に参加。2001年オルタナティブスペース「photographers' gallery」を設立。2014年〜2021年にかけてphotographers' galleryで「UNTITLED RECORDS Vol.1- 20」を開催。主な展覧会に、東京都写真美術館で個展（2009）、「来るべき世界の為に」ヒューストン美術館（2016）、「話しているのは誰？」国立国際美術館（2020）、「Postmodernism and the Global1980」/Inside-Out Art Museum（2021北京）「あかし」青森県立美術館（2021）。1981年日本写真協会新人賞、1983年第8回木村伊兵衛賞、2010年日本写真協会作家賞。

火 19:30 – 21:00

「ヨコハマみなとみらい物語III」

BankART Stationのある新高島地区は、現在、バブル期 again とでもいえる状況で、猛スピードで高層ビル、アリーナ、ホテルなどが建設中です。ゆったりとした公園や広場を配した外構計画に加えて、オフィス（研究所）ビルを中心とした建築群。建蔽率の制御と容積率の緩和、そして市民への開放という基本コンセプトは、バブル崩壊時代の荒波に耐え、計画から数十年を経た現在、その姿をあらわしつつあります。日産本社の内部を通過する横浜駅に向かってインサートされた橋（公道）とショールームや、アトリウムに巨大な16Kスクリーンとカフェを配し、2Fには自社商品が楽しめる美しい空間を展開している資生堂、構想から数十年ごしに開通した新旧の街を横断連結する「キング軸」などは、「街づくりへの意志」を辛抱強くリレーしてきた官（都市整備局）と民（企業）とのコラボレーションの象徴といえるでしょう。
このゼミは、新しく誕生する街の真実の姿をみつけ、きこえない声を聴いていくプロジェクトです。足で稼ぎ、写真を撮り、文章を書き、住んでいる人、住んでいない人にインタビューをし、この街の多様な表情を浮かび上がらせる事ができればと思います。そしてみらいの「みなとみらい物語」を綴っていこうではありませんか。

①神奈川大学　12/7
②みなとみらい21と都市デザイン室　1/18
③京浜ミュージアム - 京浜急行電鉄　3/1
④〜⑧同様に新規事業スペースの企業などをお招きします。

金 19:30 – 21:00

シュウゾウ・アヅチ・ガリバー「作品を語る」

①11/5 ②11/26 ③12/24 ④1/28
⑤2/25 ⑥3/18 ⑦6/3 ⑧6/24

「消息の将来（仮題）」を、2022年10月に開催します。展覧会で核となる約12点の作品を作家が語るとともに各回ゲストを招いて作家や作品、その活動を紹介する講座を開催します。

①村田 真［美術ジャーナリスト］
②保坂健二朗［滋賀県立美術館ディレクター］
③福住 廉［美術評論家］
④三輪健仁［東京国立近代美術館 主任研究員］
⑤長谷川 新［インディペンデントキュレーター］
⑥宇佐見康二［東京大学先端科学技術研究センター准教授］
⑦山本淳夫［横尾忠則現代美術館 館長補佐兼学芸課長］
⑧西川美穂子［東京都現代美術館 学芸員］

シュウゾウ・アヅチ・ガリバー｜ガリバーは1964年から制作を始め、その活動は半世紀を超え、1960年代後半の芸術の現場を生きた、現存する作家の１人です。今までは海外での作品の展示の機会が多く、その興味深い作品や活動の詳細はあまり知られていませんでしたが、昨年から今年にかけて、MoMAが彼の作品を展示公開し、話題になりました。